

# 貝殻集積からみた先史時代の貝交易

## 2018年度の炭素14年代測定結果をもとに

Reconstruction of Neolithic Shell Trade Based on Radiocarbon  
Data from Shell Deposits in the Okinawa Islands, FY2018

木下尚子

KINOSHITA Naoko

はじめに

- ①問題の所在と研究の意味
  - ②貝殻集積研究のあゆみ
  - ③貝殻集積の年代測定結果
  - ④貝殻提供地からみた貝交易の動向
- 結語 - まとめと今後に向けて -

### [論文要旨]

本論は、科研費共同研究の一環としておこなった貝殻の炭素14年代測定結果(較正年代)にもとづく考古学的考察である。沖縄諸島の先史時代遺跡に残る大型巻貝(ゴホウラ・イモガイ)の集積を対象に、16遺跡で検出された弥生時代併行期の貝殻集積27基のうちから、ゴホウラとイモガイの貝殻合計51個を選んで測定し、結果を整理してその歴史の意味を示した。

貝殻集積は北部九州と沖縄諸島間の貝殻の交易(貝交易)に伴う諸行為によって、貝殻産地に残されたものである。考察では、上記年代値に、貝殻消費地である北部九州の弥生遺跡に残るゴホウラ・イモガイ腕輪の時期を加えて比較した。この値は、すでに公表されている貝輪着装人骨を含む弥生人骨の炭素14年代を介して確定したものである。こうして導いた較正年代67例をもとに、1200kmの海域をはさんだ産地と消費地間の時間的関係を整理し、弥生時代から古墳時代にわたる貝交易の動向を以下の6群に分けて述べた。以下の( )内は確率分布曲線のピーク位置を示す。

- ・ A群(501 cal BC以前): 西北九州沿岸部の支石墓人によって沖縄諸島と九州間の貝交易が始まる時期。弥生早期から前期中葉の時期に対応する。
- ・ B群(500 ~ 201 cal BC): 北部九州平野部の弥生人によるゴホウラ類・イモガイ類の貝殻消費が始まり、複数種類の貝輪に対応した形の貝輪粗加工品が沖縄から輸出される時期。弥生前期後葉から中期中葉に対応する。
- ・ C群(200 cal BC ~ 1 cal BC): 弥生社会のゴホウラ類・イモガイ類の消費数が最大になり、沖縄でのゴホウラ確保に行き詰まりの兆候が見え始める時期。弥生中期後半に対応する。
- ・ D群(1 cal BC/cal AD1をまたぐ): 九州での貝殻需要が衰退し貝交易が収束する時期。弥生中期末から後期初頭に対応する。
- ・ E群(cal AD301 ~ cal AD500): 消費地が短期間のうちにヤマト王権の畿内から九州へと移り、一方で種子島広田集落において沖縄との交易関係が深まる時期。
- ・ F群(cal AD501以降): 貝交易の第二のピークに対応する。

貝交易の動向を、絶対年代を対応させて示した点が本論の特徴である。

【キーワード】 貝殻集積, 炭素14年代, 沖縄諸島, 九州, 貝交易, 貝塚時代, 弥生時代貝塚時代